

地域通貨研究会（多治見市）

中心市街地

地域活性化・地域通貨

取組の背景

多治見市は、郊外型の商業施設の発展にともなう車社会の傾向が強くなり、中心市街地の空洞化が目立つようになっていた。

- ・平成12年：多治見市議会議員の呼びかけで、市内の商店街や青年会議所などから有志が集い、地域通貨を核とした地域活性化を目指すこととなり、定期的な勉強会を開催した。
- ・平成13年：地域通貨R（りょう）を試験発行し、翌年から広く利用会員を募集した。
- ・平成16年：通貨の流通が上手くいかず、活動を休止して現在に至る。

取組の概要

地域通貨「R（りょう）」を介した地域活性化を企図し、地域通貨研究会を立ち上げた。

取組の内容

【地域通貨R（りょう）の発行】

平成13年に多治見・笠原の地域通貨を考える会が地域通貨R（りょう）を試験発行し、翌年から地域通貨R運営委員会として利用する会員（R会員）を広く募集・登録して運営した。

千円の登録料を払ってR会員として登録すると、10,000円分もしくは10時間分のサービスに相当するR100分のチケットが交付され、別途1,000円の年会費が会の運営費に充てられた。

R会員には、お互いが提供できるサービスの内容と価格の一覧が配布され、送迎やパソコン指導などの生活関連の内容が多かった。

成果

考える会のメンバーが各種団体を通じて会員を募集し、50名を超える会員登録があった。

定期的に会議を開き、運営上や制度上の問題点を詳細に検討したことで、十分なノウハウを蓄積することができ、また、会員間の交流と助け合いについては、地域通貨を介する必要が無いほど活発に行われ、会員のその後の地域での活動にプラスになっている。

成果の要因

平成12年に勉強会を開始した時から、参加者は既に地域で活発に活動している方が多く、こうした方々の交流によって多様な意見が集まり、活発に議論されたことが地域交流という成果に繋がった。

また、地域通貨の発行にあたっては新聞記事としても取り上げられるなど、地域の目新しい試みとして注目を浴び、制度のPRに役立った。

今後の課題

地域通貨の使用範囲が限られており、当初の会員からさらに輪を広げることができなかったことで、広く流通するに至らず活動を休止することになった。

理念に賛同する方や興味を持たれる方は非常に多く、また当初の会員には専門家が多く参加していたため、陶磁器のデザイナーの方が無償で通貨のデザインをするなど仕組みは十分に練り上げられたが、Rでの取引については仲の良い会員同士のままごとの取引に止まり、多くの人を取り込んでいくだけの魅力に欠けていたことは否めない。

また、中心的な会員は忙しい方が多かったため、専従として地域通貨に関わることや、常設の事務局を設けることが難しく、NPO法人の立ち上げも検討されたが、見送られた。

行政への期待

地域興しは、住民サイドから盛り上げていくべきであり、行政は活動が行き詰まったときに手助けしてもらえるような仕組みがあると良い。

活動には金銭がついて回るものであるので、資金づくりの工夫ができるまでの間は何らかの制度があると良い。

この人にお話をうかがいました！

地域通貨研究会

地域通貨R運営委員会事務局長 土本房子さん

調査日：平成18年11月6日（月）

調査者：東濃振興局 楓